

1999年東京都知事選

報道の分析

- テレビ報道の特質を探る -

萩原 滋・福田 充・横山 滋
李 光鎬・川端美樹・斉藤慎一

1999年4月に予定された東京都知事選に向けて各党の候補者選びの動きは、再選が有力視されていた青島幸男都知事が2月1日に突然に不出馬を宣言したことをきっかけに急に慌しさを増し、新たな展開をみせ始める。それまで田中真紀子元科技庁長官を擁立しようとして果たせなかった自民党は、1月末の時点で都議団を中心に柿沢弘治元外相を候補とする意向を固めつつあったが、現職知事の予想外の不出馬宣言を受け、民主党を離党して立候補する見込みの鳩山邦夫元文相の推薦も含めて、もう一度候補者を選び直すことになった。結局、自民党は鳩山支持を見送り、公明党の協力が得やすい明石康元国連事務次長を候補とするのを2月10日に決定したが、この選考過程に不満をもつ柿沢が党の決定に造反する形で出馬の意向を示したために党内の調整に手間取り、明石が自民党の要請を受諾して立候補を宣言したのは、17日の柿沢の正式な出馬表明から2日後の2月19日となった。これにより2月以前に共産党の推薦で立候補を決めていた元全労連議長の三上満に加えて、無所属の野末陳平元参院議員、国際政治学者の舛添要一、さらに鳩山邦夫、柿沢弘治の2名の現職衆院議員、そして明石康の6名が有力候補として顔を揃えることになった。

さらに3月に入って石原慎太郎元運輸相の立候補が取り沙汰されるようになると、野末が出馬を取りやめて「無党派連合」を結成して舛添を支援することを宣言する。そして3月10日には石原が無所属で立候補することを正式に表明し、これで野末から石原へと顔ぶれは入れ替わったものの、やはり6名が有力候補として残ることになった。3月25日の告示日には、この6名とドクター・中松を含めて19名が立候補の届け出を行い、本格的な選挙戦が開始された。その後、石原の政治姿勢に危惧を覚えた青島都知事が、4月6日に鳩山候補と共に記者会見を開いて鳩山支援を表明するなどの動きはあったものの、全体としてみれば告示後の選挙戦は、さしたる波乱もなく順調に進行している。この間、各種の世論調査では石原の優位が伝えられる一方で、いずれの候補も4分の1の票を集められずに再選挙になる可能性も喧伝されたが、4月11日の投票の結果、石原が約166万票を獲得して、2位の鳩山に80万票以上の大差をつけて都知事に初当選を果たしたのであった。

こうした都知事選の過程は（表1参照）、個性豊かで知名度の高い候補者が熾烈な争いを展開したことから、一般の関心と呼び、各メディアでかなり大きく取り上げられてきた。とりわけ3月25日の告示前までは、有力候補が民放テレビの番組に何度も出演して論戦を繰り広げ、アメリカ型のテレビ選挙の到来を思わせるような様相を呈していたのである。

ところで私たちは、報道機能の拡充が顕著なテレビというメディアに焦点を合わせ、その報道内容や社会的役割・機能などを先行する新聞と対比して、両者のメディア特性による違いを実証的に検証するためのプロジェクトを1997年度から継続している⁽¹⁾。その最初のステップとして1997年11月25日から12月1日までの1週間に東京の民放5局とNHK総合及び衛星局（BS1）で夕方以降に放送されたニュース番組の詳細な内容分析を行ったが、そこではテレビニュースの娯楽化傾向の検証が中心的課題とされ、特に民放のニュース番組では、料理や生活情報など従来の概念ではニュースとは言えないような内容が大きな比重を占め（ソフト化の傾向）、またテロップやBGM、効果音など各種の視覚・音響装置が多用されていること（演出過剰化の傾向）が明らかにされている（萩原ほか、1998）。そして今回は、一定期間にわたる継続的報道が予測される都知事選を事例として取り上げ、テレビと新聞の報道傾向の違いを時間を追って比較検証すると共に、

表1 東京都知事選の動き〔概要〕

2月1日（月）	青島幸男知事が4月の都知事選には立候補しないことを表明。
2月2日（火）	民主党は鳩山邦夫副代表の擁立に向けて本格的調整に入るが、鳩山は「民主党を離党して無所属での出馬」を示唆。一方、柿沢弘治元外相の擁立を検討してきた自民党は、青島の不出馬表明を受けて、鳩山の推薦も含めて再検討の模様。
2月3日（水）	野末陳平元参院議員が正式に出馬表明。
2月8日（月）	自民、公明両党内で明石康元国連事務次長が有力候補として浮上、自民党は鳩山が出馬しても、党としては支持しない方針を固める。
2月9日（火）	鳩山が出馬の意向を表明。明石擁立に関して自民党は、結論を出せず。
2月10日（水）	自民党は、明石擁立を決定、公明は推薦の方向。
2月12日（金）	鳩山邦夫、舛添要一（国際政治学者）の両名が正式に立候補を表明。
2月14日（日）	柿沢が出馬の意向を表明、明石は回答を保留。
2月17日（水）	自民党の決定に造反し、柿沢が正式に出馬表明。自民党は、改めて明石擁立を確認。
2月18日（木）	明石が小淵首相に自民党の出馬要請を受諾する考えを伝える。
2月19日（金）	明石が立候補の会見、政策を発表。鳩山は、民主党に離党届けを提出。
3月4日（木）	自民党・党紀委員会が柿沢に離党勧告。
3月6日（土）	野末が出馬を取りやめ、「無党派連合」を組んで舛添を支援することを表明。
3月8日（月）	石原慎太郎元運輸相、出馬へ最終調整。
3月10日（水）	石原が無所属で立候補を正式に表明。
3月25日（木）	12都道府県知事選告示、都知事選に19名が届け出。
3月29日（月）	自民党の党紀委員会は、石原支援の長男・伸晃を党の役職停止処分とすることを決定。
4月1日（木）	公明党は、自民党推薦の明石を都本部推薦とすることを決定。
4月6日（火）	青島知事が鳩山と共に記者会見をして鳩山支援を表明。
4月11日（日）	投票日
4月12日（月）	石原が2位の鳩山に80万票以上の大差をつけて当選。
4月23日（金）	石原が東京都知事に就任。



脚注

このプロジェクトは、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所の研究・教育基金の補助を受けて平成9年度から3カ年の予定で発足したものである。また本稿で報告する研究に

関しては、その一部を平成10年度の放送文化基金の資金援助を受けて実施したことを明記しておきたい。

テレビに関する分析対象を朝の情報番組やワイドショーにも拡張して、いわゆるニュース番組以外の情報番組で都知事選をどのように扱っているかを併せて検討してみることにした。民放各局は、早朝から午後時間帯を各種の情報番組に充当する割合を高めており、そこではニュースも多く取り上げられるようになってきている。すなわち、夕方以降のニュース番組を対象とした前回の分析では、ニュースとは言い難い内容がニュース番組に含まれていることを問題としたわけだが、逆にニュース番組以外でもニュースが扱われるようになって報道番組と情報番組の境界が曖昧になりつつあるとも考えられるので、その点を検証するために今回は分析対象となる番組の枠を拡大したわけである。

分析対象の期間及び番組の設定

今回の都知事選では、共産党を除く各党の候補者選びが難航して無所属の候補者が乱立する結果となったが、そうした候補者や政党の思惑などに関する話題が2月初めから盛んに報道されており、また一部の立候補予定者によるテレビ討論も2月から3月にかけて活発に行われてきた。しかし本研究では、3月25日の告示から4月11日の投票までの18日間の選挙戦及びその後の2日間、すなわち4月13日までの20日間を本格的な分析対象の期間に設定しており、それ以前の選挙関連のテレビ報道や討論番組については、そのいくつかを参考資料として録画するにとどめた。そして3月25日から20日間にわたって東京の民放5局及びNHK総合の地上波6局で都知事選関連の報道が行われる可能性のある番組をすべてビデオに収録したわけだが(表2参照)、そこには通常の情報番組・情報番組だけでなく、選挙関連の特別番組も含まれている。こうして分析対象とされた番組の総数は506本、放送時間に換算すると661時間37分に達する。

なお、この時期は、年度の移行に伴う番組改編期にあたり、TBSの早朝の情報番組「おはようクジラ」は3月26日で終了、翌週の月曜日(3月29日)から「エクスプレス」がスタート、フジテレビの午前と午後の時間帯のワイドショーは、年度が変わると共に、旧来の「ナイスデイ」「ビッグトゥデイ」から「とくダネ!」「2時のホント」へとそれぞれ衣替えをしている。またNHKの「おはよう日本」は午前6時から5時、フジテレビの「スーパーニュース」は午後5時55分から5時半へと4月1日から開始時間を早めており、全体として報道・情報番組の時間枠が拡大する傾向が示されている。

こうして収録した番組については、都知事選報道の有無にかかわらず、番組開始時からの放送内容を項目ごとに整理して時間経過と共に記録する形で構成表を作成し⁽²⁾、それを以後の分析の基礎資料とすることにした。一方、新聞に関しては朝日、毎日、読売の3紙を保存しておいたが、都知事選関連の報道量を調べるためには主としてデジタル化された各紙のデータベースを利用することにして、紙の新聞は、それらのデータをチェックする目的で使用している。

告示前の報道傾向

本研究では、3月25日の告示以降の選挙戦を主たる分析対象としているが、その前に都知事選に関する告示前の報道傾向を概観しておくことにしよう。今回の都知事選に関するテレビ報道の際立った特徴は、知名度の高い立候補予定者による討論が民放番組を

脚注

各番組の構成表の作成に際しては、常磐大学で福田が担当する「コミュニケーション実習(内容分析)」の履修者、慶應義塾大

学メディア・コミュニケーション研究所に設置された萩原研究会のメンバーの協力を得た。記して謝意を表したい。

表2 収録番組一覧〔1999年3月25日(木)～4月13日(火)〕						
放送局	番組名(レギュラー番組)	開始時刻	終了時刻	長さ(分)	放送日	備考
NHK	NHKニュースおはよう日本	6:00	8:15	135	全日	土日は時間短縮;4月1日より16:00開始(1時間延長)
	首都圏ネットワーク	18:00	19:00	60	週日	
	NHKニュース7	19:00	19:57	57	全日	土日は時間短縮
	NHKニュース9	21:00	21:30	30	週日	
	ニュース11	23:00	23:35	35	週日	
	週刊こどもニュース	8:30	9:00	30	日曜	この間, 3月28日のみ放送
	NHK週刊ニュース	8:30	9:15	45	土曜	4月より開始
	特報首都圏99	18:10	18:40	30	日曜	4月より開始
NTV	ズームイン!!朝!	7:00	8:30	90	週日	
	ルックルックこんにちは	8:30	10:25	115	週日	
	ザ・ワイド	13:55	15:50	115	週日	
	NNNニュースプラス1	17:30	19:00	90	全日	土日は時間短縮
	NNNきょうの出来事	22:54	23:25	31	全日	金土日は時間短縮
	ズームイン!!サタデー!	5:59	8:00	121	土曜	
	ウェークアップ!	8:00	9:30	90	土曜	
	THEサンデー+30	8:00	9:55	115	日曜	
TBS	おはようクジラ	6:00	8:30	150	週日	3月26日最終回
	エクスプレス	6:00	8:30	150	週日	3月29日より開始 4月9日12日は放送中止
	JNNニュース1130	11:30	12:00	30	週日	
	ジャスト	14:00	15:55	115	週日	
	ニュースの森	17:55	19:00	65	全日	土日は時間短縮
	筑紫哲也NEWS23	22:54	23:50	56	週日	金は時間延長
	ブロードキャスター	22:00	23:24	84	土曜	
	スポーツ&ニュース	0:30	0:55	25	土日	日は時間短縮
	サンデーモーニング	8:00	9:54	114	日曜	
	報道特集	18:00	18:54	54	日曜	
CX	めざましテレビ	5:55	8:00	125	週日	
	ナイスデイ	8:25	9:55	90	週日	3月31日最終回
	とくダネ!	8:00	9:55	115	週日	4月1日より開始
	FNNスピーク	11:30	12:00	30	月-土	
	ビッグトゥデイ	14:00	15:50	110	週日	3月31日最終回, 3月26日は放送中止
	2時のホント	14:00	15:25	85	週日	4月1日より開始
	スーパーニュース	17:55	19:00	65	全日	土日は時間短縮;4月1日より17:25開始(30分延長)
	ニュースJAPAN	23:20	0:30	70	全日	土日は時間短縮
	土曜一番!花やしき	5:55	8:30	155	土曜	
	花やしき	9:55	11:25	90	土曜	
	報道2001	7:30	8:55	85	日曜	
	スーパーナイト	22:00	22:55	55	日曜	
ANB	やじうまワイド	5:50	8:00	130	月-土	
	スーパーモーニング	8:00	9:55	115	週日	
	ワイド!スクランブル	11:30	13:05	95	週日	
	スーパーJチャンネル	17:00	19:00	120	全日	土日は時間短縮
	ニュースステーション	22:00	23:20	80	週日	
	ザ・スクープ	23:30	0:40	70	土曜	
	サンデープロジェクト	10:00	11:45	105	日曜	
	サンデージャングル	23:30	0:25	55	日曜	
TX	ニュースワイド夕方いちばん	17:00	17:55	55	全日	土日は時間短縮
	ワールドビジネスサテライト	23:00	23:45	45	週日	
放送局	番組名(特別番組)	開始時刻	終了時刻	長さ(分)	放送日	備考
NHK	東京都知事選挙候補者経歴・政見放送	22:00	22:35	35	3月28日・4月1日	3月31日は25分, 4月1日は30分の放送
NHK	統一地方選特集「首都決戦・東京都知事選」	21:00	22:10	70	4月4日	
NHK	1999統一地方選	20:00	1:00	300	4月11日	
NHK	徹底分析1999統一地方選・ドキュメント選挙戦	1:15	3:17	122	4月11日	後出の脚注8参照
TBS	東京燃ゆ99新知事誕生	23:30	0:00	30	4月11日	
CX	FNN選挙スペシャル	22:00	0:00	120	4月11日	
TX	99首都決戦・決定版選挙スペシャル	23:30	0:30	60	4月11日	
NHK	統一地方選・列島ドキュメント	8:35	9:30	55	4月12日	

舞台上に盛んに行われたことであろう。その嚆矢となったのは、2月7日（日）早朝の「報道2001」というフジテレビの討論番組であった。この時には、すでに立候補の意思を表明していた三上満、野末陳平の他に、出馬に意欲を示す柿沢弘治、舛添要一、そして4年前の都知事選に出馬した経験をもつ民主党の岩国哲人、自民党の調整役となる深谷隆司総務会長の6名が出演している。その後、週末の討論番組を中心に、有力候補者が一同に会して論争をする場が次々に設けられ、この種のテレビ討論は2月だけで10回を数えているが、2月中盤以降の出演者は明石、柿沢、野末、鳩山、舛添、三上の6名に限定されている。そして3月に入ってしばらく鎮静化していた討論番組は、石原が立候補を表明してから再び活況を呈し始め、今度は出馬を辞退した野末に代わって石原が加わり、やはり6名の有力候補による討論が再開している⁽³⁾。なお、こうした論戦の舞台は、当初は「報道2001（CX）」「サンデープロジェクト（ANB）」「朝まで生テレビ（ANB）」といった週末の討論番組を中心にしていたが、やがて「筑紫哲也NEWS23（TBS）」「ニュース・プラス1（NTV）」などのニュース番組、さらには朝の情報番組（「土曜一番花やしき（CX）」「スーパーモーニング（ANB）」）や午後のワイドショー（「ビッグトゥデイ（CX）」「ザ・ワイド（NTV）」）にまで広がっている。

しかし、こうして民放各局で華やかに展開されたテレビ討論は、3月25日の告示を境に一斉に姿を消し、その後はむしろNHKの「東京都知事選挙候補者経歴・政見放送」といった公式の場で各候補者の声が伝えられるようになっていく。民放各局は、選挙期間中の報道には、より厳密な“公平性”が求められるという配慮から、告示後の討論番組を自粛したということであり⁽⁴⁾、このことは選挙報道に関するNHKと民放の役割や立場の違いを端的に示していると言えよう。つまり告示前までは正式の選挙戦ではなく、従って出演者も立候補予定者にすぎないので、ある程度自由に出演者を選んで非公式の討論を企画するのは民放に適しているとしても、告示日に届け出を済ませて正式の候補者となった後では、より公式的で慎重な扱いが必要になるために、民放よりも公共性の高いNHKの方が適性が高くなるということである。一方、新聞に関しては、朝日、毎日、読売の3紙とも告示前から都知事選についての連載を開始しており、東京都の抱える問題や選挙の争点、有力候補の政策などを継続的に取り上げている⁽⁵⁾。

告示後の報道量の継時的変化

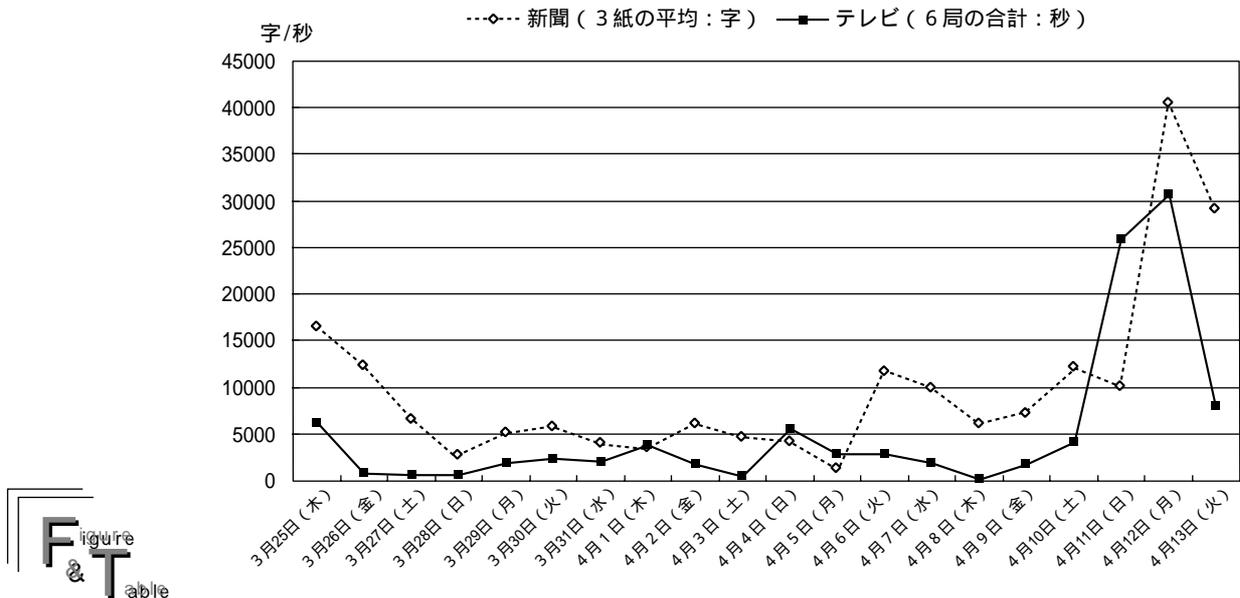
それでは3月25日の告示後、正式の選挙戦に入ってから報道には、どのような傾向がみられるのであろうか。まず新聞については記事の総字数⁽⁶⁾、テレビについては秒単位で放送量を測定し、3月25日から4月13日までの20日間にわたって都知事選関連の報道量の継時的変化を調べてみることにしよう。もとより測定単位が異なっているために新聞とテレビの報道量を直接に比較することはできないが、新聞については朝日、毎日、読売の3紙の平均、テレビについてはNHKと民放を併せた6局の合計を各日の報道量の指標としてプロットした結果が図1に示されている。なお、統一地方選の一環として東

脚注

この間、明石が日程の都合で3月14日午前の「報道2001」「サンデープロジェクト」への出演を見合わせたところ、放送後に心配した支持者からの問い合わせが殺到して、この種の番組に欠席することのマイナス効果を実感したという。（朝日新聞3月15日朝刊「99春・選ぶ・首都の乱 テレビ討論に“異変”」）毎日新聞4月2日朝刊「99都知事選・首都乱戦 消えた討論会」たとえば朝日新聞は2月15日の夕刊から「99春・選ぶ・首都の乱」というコラムを設けて、各党の候補者選びの経緯や背景、

都知事選の争点などを、逐次、解説しているし、毎日新聞は2月2日夕刊から「99知事選・首都混迷」、読売新聞は2月3日朝刊から「選挙列島都知事選」というタイトルで同様の連載を開始している。これは各紙のデータベースを「都知事」というキーワードで検索し、選挙と関係のない記事を削除した後、さらにオリジナルの新聞と照合した結果に基づいているが、元の新聞に掲載されていた写真については、その大きさなどを考慮していない。

図1 報道量の継時的変化(テレビと新聞の比較)



京都知事選を位置づけているような場合には、それを関連報道として扱っているが、都知事選と切り離れた形での他の知事選についての報道、あるいは柿沢、鳩山両衆院議員の立候補に伴う東京2区及び15区での補選についても、それらが都知事選とは独立に報じられている場合には、都知事選関連報道には含めていない。またNHK総合で3月29日から4月1日まで4日間にわたって放送された19名の「東京都知事選挙候補者経歴・政見放送」は、公的色彩の強いものではあるが、ここではそれを都知事選関連報道に含めることにした⁽⁷⁾。

さて図1には、3月25日の告示以降、しばらく低迷していた都知事選関連の報道が4月11日の投票を迎えて急上昇している様子が明示されている。全体としてみれば、投票翌日の12日に報道量がピークに達している点は、新聞とテレビに共通した特徴となっているが、しかし選挙当日に特別番組を設けて選挙結果を速く伝えることに力点を置いているテレビに比べると、日曜の夕刊を発行しない新聞の場合には、選挙当日の報道量は、前日の土曜日よりもわずかに落ち込む傾向を示している。なおテレビ各局の中ではNHKが開票速報に最も熱心に取り組んでおり、投票日の夜10時から5時間にわたって統一地方選挙の開票速報を行った後、さらに深夜1時15分から約2時間をかけて首都圏の全選挙結果の詳細を放送しているのである⁽⁸⁾。一方、民放に関しては、TBS、フジテレビ、テレビ東京は日曜の夜に特別番組を編成しているが、日本テレビとテレビ朝日は、通常の報道番組の枠内で選挙結果を伝えている。従って、放送局別にみると、NHKとテレビ東京の選挙関連報道量は、投票当日にピークを迎えているのに対して、その他の民放4局は、いずれも翌12日に最大の放送時間量を記録する結果となっている。

もちろん報道内容は、選挙戦の進展に伴って大きく変化している。ただし、さまざま

脚注

NHKでは、この経歴・政見放送を4月2日及び5日から7日にかけて早朝の「おはよう日本」という番組の中で再放送している。従って、ここでは最初の経歴・政見放送は、特別番組として処理をしたが、その再放送に関しては、レギュラー番組の中の都知事選関連報道項目として扱っている。

深夜12時を過ぎてからの放送は、厳密には翌日の放送とすべきであるが、翌日の早朝というよりは、その日の延長という方が実感に近いので、原則として深夜放送は、前日の放送分に含めることにした。

な企画や連載記事を通じて東京都の抱える課題や選挙の争点、主要候補の政策や人となりなどを伝えようとしている新聞各紙に比べると⁽⁹⁾、テレビにおける選挙報道は、きわめて表面的、画一的でバラエティに乏しく、何よりも絶対量が不足している。その中ではNHKが、経歴・政見放送以外にも、「首都圏ネットワーク」の中で「東京都知事選候補者を追って」というコーナーを設けて3月30日から主要7候補の選挙活動の様子、演説やインタビューを3日続けて放送し、さらに4月4日の「統一地方選挙特集」で、やはり7候補の選挙運動の様子を紹介すると共に、「財政再建」「少子化・高齢化対策」「めざす知事像」といった共通の質問を通じて各候補の政策や哲学を明らかにしようとするなど候補者に関する情報を多少とも積極的に伝えようとする姿勢を示していることが目につく。一方、民放に関しては、4月1日の「ニュースステーション(ANB)」で安井誠一郎、東龍太郎、美濃部亮吉、鈴木俊一の4人の元知事の仕事や生活を描いて都知事に求められる資質や職務を紹介したこと、4日の「サンデープロジェクト(ANB)」で主要6候補の政策を詳しく紹介したこと、9日の「筑紫哲也NEWS23(TBS)」で有力6候補の選挙戦を取り上げて、それぞれが売り物とする政策を要約して示したこと、選挙前日の10日の「ザ・スクープ(ANB)」で都知事の職務や公約の是非を検討したことが目立つ程度で、まとまった形で候補者に関する情報を提供している番組は他にはほとんど見当たらなかった。

選挙期間中のテレビ報道の内容

それではテレビを中心に、もう少し詳しく選挙戦に関する報道内容を検討してみることにしてしよう。その前にまず、上記のNHKと民放の違いを明確にするために、対象期間中のテレビにおける都知事選関連の報道量の推移をNHKと民放に分けて整理した結果を図2に示す。この20日間における延べの報道量は、民放5局を併せると1054時間24分となり、NHKの585時間16分を大きく上回っている。しかし図2をみると、民放の選挙報道は、4月11日の投票前後に集中しており、この時期と3月25日の告示後の数日間を除く選挙戦の期間に関しては、民放5局を併せてもNHK1局の報道量に達していないことが明らかになる。もちろんNHKの場合には、3月29日から4月1日にかけての各候補の経歴・政見放送、4月2日及び5日から7日にかけてのその再放送分が含まれており⁽¹⁰⁾、それを割り引いて考える必要があるかもしれないが、それにしても選挙期間中の民放の報道量の少なさは、告示前はテレビ選挙と言われるほどに立候補予定者が頻繁に登場していただけに、余計に際立つ結果となっている。

NHKも含めて、収録された全番組の半数以上で都知事選関連の話題を取り上げた日は、告示日の3月25日と投票が近づいた4月10日以降の時期を除くと、わずか4月6日の1

脚注

たとえば朝日新聞は、告示後間もなく「ここを聞く(3月26日 4月3日)」というコラムでドクター・中松を含めた主要7候補のインタビュー記事を連載、さらに「主な7候補に政策を聞く(3月30日、31日)」「都知事選・主な候補はこんな人(3月27日 29日)」などで主要7候補の政策や人柄を紹介しているし、また「選ぶ選べ選ぶとき(3月26日 4月10日)」という連載では、有権者の立場からみた選挙、候補者に関する印象や私見を次々と取り上げている。また読売新聞は「密着・都知事選(3月26日 4月3日)」で主要6候補の人物像や政策を紹介、「争点ルポ・都知事選(3月31日 4月7日)」で少子化、震災対策、中小企業対策といった争点を取り上げているし、すでに公示前に「東京をどうする(3月3日 13日)」というコ

ラムで主要な立候補予定者のインタビューを済ませていた毎日新聞は、告示後すぐに「私のみた候補者(3月27日 30日)」でドクター・中松を含む7名の候補者の妻や子供の視点からの人物紹介を試みているし、「ザ・都知事(3月30日 4月5日)」では過去の知事の業績や残された課題、「99都知事選・焦点の7候補に政策アンケート(4月3日 11日)」ではシルバーバスや老人医療、外郭環状道路建設、都営バスの赤字路線、都民投票条例、道徳教育など具体的な施策に関する7名の回答結果を掲載している。

2回にわたる経歴・政見放送の延べの放送時間量は221時間2分、これを除くとNHKの都知事選関連報道の総量は364時間14分となる。

図2 報道量の継時的変化（NHKと民放の比較）

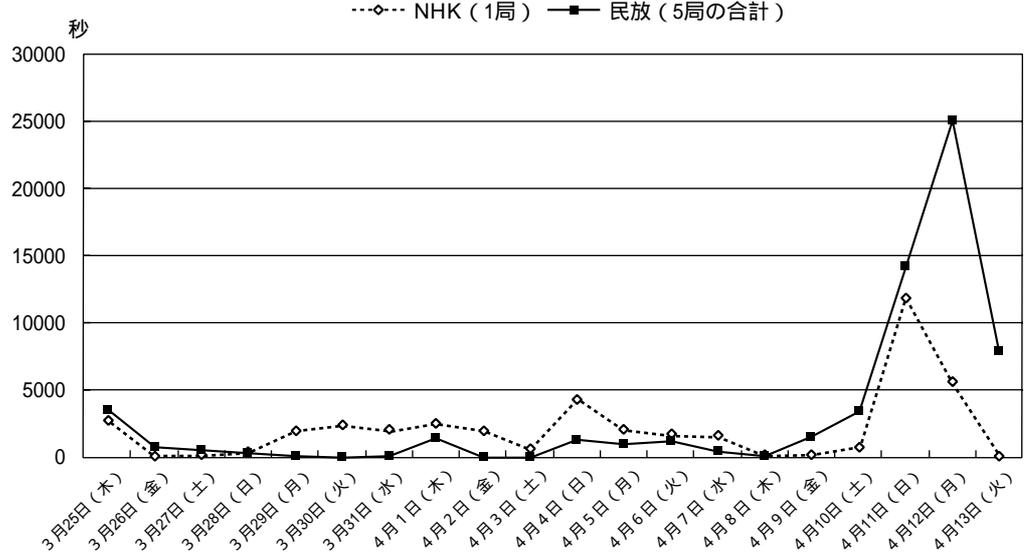


Figure & Table

日を数えるにすぎない。この日は、午後4時半に青島都知事が鳩山候補と共に記者会見を開き、鳩山支援を正式に表明したために、「ワールド・ビジネス・サテライト (TX)」を除く、夕方以降の民放のニュース番組で一斉にこの話題を取り上げている。この報道に関しては、むしろNHKの方が慎重な姿勢を示しており、夕方の「首都圏ネットワーク」で記者会見の様子を伝えた後、「ニュース7」ではニュースフラッシュの1項目として扱い、それ以降の「ニュース9」「ニュース11」ではこの件に関する報道を全く行っていない。

さて3月25日の告示日には、報道番組はもちろんのこと、「ザ・ワイド (NTV)」「ジャスト (TBS)」「ナイスデイ (CX)」「スーパーモーニング (ANB)」以外の情報番組でも一律にこの話題を取り上げている。午前中の番組では、統一地方選スタートの告知が中心になっているが、それ以降の番組では、ほとんどの場合、都知事選の主要候補の街頭演説を次々に映し出した後、残りの候補者名をリストで提示するという形の画一的な内容になっている。この他に各党代表の演説の映像や知事選の行われる都道府県名を挿入する場面が多くみられ、この日のテレビ報道は、いずれもかなり似通った構成になっていることに驚かされる。主要候補の演説を流す場合にも、届け出の順にするという事前の申し合わせがあったのか、すべての番組で例外なく鳩山、柿沢、舛添、三上、明石、石原というオーダーを採用しているのである。ただし、ドクター・中松の扱いは局によって異なっており、テレビ東京以外の民放は、だいたい主要候補から外しているのに対して、NHKでは石原の後に、テレビ東京では石原の前に中松の映像を流している。これと同様の違いは、新聞についてもみられ、読売は中松を主要候補とはみなさず、6名を主要候補としているのに対して、毎日では中松を入れて主要7候補とすることが多く、また朝日は終始一貫して主要7候補という方針を堅持している（前出の脚注9を参照）。

そして翌26日には、「おはようクジラ (TBS)」「めざましテレビ (CX)」「やじうまワイド (ANB)」という早朝の民放番組の中で都知事選がスタートしたことを手短かに伝え、さらに27日、28日の週末の2日間に8番組で選挙戦の様を取り上げている。その後は3月29日から30日にかけて3番組で「石原伸晃に対する自民党の役職停止処分」、3月31

日から4月1日にかけて7番組で「公明党・都本部で明石推薦を決定」、そして4月6日から7日にかけて17番組で「青島都知事が鳩山支援を表明」というニュースを報じているが、この他には選挙期間中に特筆すべき出来事は何も生じていない。また4月4日から5日にかけてNHK、TBS、テレビ朝日、テレビ東京は、それぞれの世論調査の結果を報告しており、テレビ東京では“石原優位”と伝えているが、他局ではむしろ都知事選に対する有権者の関心の高さを強調していることが目につく。なお世論調査については、テレビよりも新聞の方がはるかに詳しい結果を報告しており、そのために4月6日から7日にかけて新聞の選挙関連報道が全体に増加する傾向を招来している（図1参照）。

先に述べたように、選挙期間中に特別番組やいくつかの特集が散発的に組み込まれているためにNHKや民放の都知事選関連の報道量は、この間に何度か増減を繰り返しているが、それが本格的な上昇の兆しを見せ始めるのは投票前日の10日のことである。この日には、19番組中15番組で都知事選を取り上げており、その内容も「投票前の最後の訴え」という形で主要候補の街頭演説の様子⁽¹⁾と候補者リストを提示するパターンが繰り返されているが、ただ告示日の報道に比べると番組によるばらつきが大きく、その内容もかなりバラエティに富んでいる。たとえば「ウェークアップ！（NTV）」では政治学者による選挙予測と分析、「ザ・スクープ（ANB）」では主要候補の公約の是非についての討論にかなりの時間を割いており、この他に「選挙違反件数の減少」「明石候補が敗れた際の自民党執行部の責任」「天気と投票率の関係」といった話題がいくつか取り上げられているのである。

そして投票当日の11日（日）は、NHK、TBS、フジテレビ、テレビ東京は特別番組を編成し、日本テレビは「きょうの出来事」、テレビ朝日は「サンデージャングル」という通常の番組の枠内で選挙結果を報じることに力を注いでいる。特にNHKは、民放に先駆けて、午後8時からの特番ですぐに出口調査の結果を報告しており、その後も5時間にわたって、他の知事選の開票速報と平行して、都知事選に関する情報を有力候補の事務所⁽²⁾や政党本部と中継で結びながら逐次伝えており、午後9時過ぎにいち早く「石原当確」を打ち出している。この日の都知事選関連の報道量は、NHKが196分31秒と飛び抜けて大きく、次いでフジテレビ（98分2秒）、テレビ東京（59分43秒）、TBS（35分42秒）、テレビ朝日（26分16秒）、日本テレビ（17分25秒）という順になっている。

このように選挙報道に対する力の入れ方は放送局によって大きく異なっているが、石原の当選が確定になって以降の番組の構成は、やはり相当似通った内容になっている。たとえば「サンデージャングル（ANB）」以外は、いずれの番組でも石原と生中継でのインタビューを行っているし、落選した主要候補については記者会見の様態を放送すると共に、その何人かと直接にインタビューすることを試みている。この他に典子夫人や長男伸晃の談話を通じて、あるいは24年前の都知事選での敗北以来の石原の政治家としての軌跡、今回の選挙の出馬表明から当選までの選挙活動のドキュメントなどを通じて、石原の人間像を描こうとする試みがいくつかなされている。こうして選挙が終了すると、選挙期間中に“公平性”への配慮から特定の候補者についての詳しい報道を抑制していたことへの反動を示すかのように、石原のみならず、落選した主要な候補についても、その家族関係やプライベートな部分も含めて、多様な情報が噴出して来るのである。

脚注

この日の報道でも主要候補の提示順序は維持されているが、フジテレビとテレビ朝日では、告示日の主要6候補に加えて、ドクター・中松の演説を流すようになっている。投票日のNHKの特番では、ドクター・中松の談話を一切取り上

げておらず、民放もまた中松についての情報をほとんど伝えようとしていない。投票が終了すると同時に、ドクター・中松は主要候補のリストからすっかり外されてしまった観がある。

選挙後のテレビ報道の内容

石原当選という形で選挙戦が決着してから一夜明けた12日(月)には、新聞、テレビとも都知事選関連の報道量がピークに達している。新聞各紙は12日の朝刊で初めて選挙結果を報じるわけであり、その詳報や分析に多くの紙面を割かざるを得ない。それに対して、前夜に選挙結果の速報を済ませたテレビの報道内容は、すでにこの日から多様化する傾向を示している。早朝の情報番組では、やはり選挙の結果や各党の反応など選挙戦に関する情報を中心に据えているが、それ以降の番組では、むしろ石原個人に焦点を当てた報道が目立って多くなってきている。何よりも、この日は、石原自身が「おはよう日本(NHK)」「スーパーモーニング(ANB)」「ザ・ワイド(NTV)」「夕方いちばん(TX)」「ニュースステーション(ANB)」「筑紫哲也NEWS23(TBS)」と朝から夜までたて続けにテレビに出演して、さまざまなインタビューに答えているのである。また、多忙なスケジュールの合間を縫って午前11時前に選挙を手伝った渡哲也ら石原軍団と呼ばれる芸能人の一団と共に弟の裕次郎の墓参をしており、その様子が民放のみならず、NHKの「首都圏ネットワーク」「ニュース7」「ニュース9」も含めて、多くの番組で繰り返し放送されている。それは格好の絵柄になるらしく、新聞3紙でもこの日の夕刊に墓参の写真が大きく掲載されており、毎日と読売ではそれが1面のトップを飾っている。このように弟の裕次郎や石原軍団との関係がクローズアップされる一方で、石原軍団の一員でもある俳優の良純、衆院議員の伸晃など石原の子息たちも「とくダネ!(CX)」「スーパーニュース(CX)」「ニュースの森(TBS)」といった番組に出演して、それぞれに父親の勝因や人間像などについて語っている。

石原本人のインタビューでは、横田基地の軍民共用、財政再建、道徳教育などに関する公約に質問が集中しており、それはまた他の番組でも広く取り上げられる重要な選挙後の争点になっている。また多くの番組で、都庁職員、政府関係者、あるいは一般の人たちの石原に対するコメントや新都政に対する期待の声などを放送しているが、新聞各紙が石原に関する外国メディアの報道をかなり熱心に伝えているのに比べると、テレビでは「ニュースの森」で香港からの中継を行った程度で、あまり海外の反応を報道することに時間をかけていない。この他、この日は当選した石原だけでなく、落選した有力候補についても「スーパーモーニング(ANB)」「とくダネ!(CX)」「ザ・ワイド(NTV)」といった情報番組で選挙戦の様相やそれを支えた妻たちの活躍ぶりを伝えているが、石原と直接に結びつかない話題としては、やはり「自民党執行部の責任問題」がこの日の最大の争点となっており、ほとんどの報道番組が責任問題に関する自民党の小淵総裁、森幹事長、村上正邦、亀井静香らの発言を取り上げている。

このようにして12日にピークを迎えた報道量は、翌13日になって大幅に低下する。特にNHKは極端で、早朝の「おはよう日本」の中で「石原知事に当選証書」というニュースを簡単に伝えただけで、この日は他に都知事選に関する報道を全く行っていない。一方、民放に関しては「ズームイン!!朝!(NTV)」「ルックルックこんにちは(NTV)」「エクスプレス(TBS)」「めざましテレビ(CX)」「やじうまワイド(ANB)」「スーパーモーニング(ANB)」と朝の情報番組が揃って前日の裕次郎の墓参の様子を伝えており、またTBSの「JNNニュース1130」「ニュースの森」「筑紫哲也NEWS23」、テレビ朝日の「スーパーチャンネル」「ニュースステーション」といった夕方以降の報道番組では、石原が公約に掲げた「横田基地の返還の可能性を日米政府が否定」というニュースを一律に取り上げている。さらに、この日の情報番組では、「ザ・ワイド(NTV)」「とくダネ!

(CX)」で典子夫人に焦点を合わせた特集を組んだり、「ルックルックこんにちは(NTV)」「ザ・ワイド」で落選した有力候補の今後の身の振り方を話題にしたり、また「ワイド!スクランブル(ANB)」では「徹底追跡、謎の候補者・羽柴誠三秀吉の秘密」という企画で、それまで全く取り上げられることのなかった候補者のインタビューを試みるなど、選挙期間中の制約から解放されて、民放独自のカラーを早くも打ち出すようになっているのである。

ところで今回の都知事選に関しては、3月25日の告示以降、しばらく低迷していた報道量が投票前日の10日から急激に上昇して投票翌日の12日にピークを迎えるというパターンを示すことは先に述べた通りである。これは新聞、テレビに共通したパターンになっているが、告示前から都知事選に関するさまざまな連載を継続している新聞に比べると、選挙戦に入ってからテレビ報道は、きわめて抑制されて絶対量が少なく、ようやく投票日を迎えてから大幅な伸びを記録しているのである。つまり、新聞に比べて、テレビの選挙報道は、投票以降の3日間に集中する傾向が強く、その傾向は特に民放に関して顕著に現われていることになる。そこで分析対象となった20日間の総報道量の中で、4月11日の投票以降の3日間の報道量が占める割合を計算してみると、新聞は40%、テレビは62%となり、テレビ報道が投票日からの3日間に集中していることが確かめられる。またNHKと民放のそれぞれについて後半の3日間の報道量の比率を計算すると前者は42%、後者は75%となっており、民放の場合には選挙期間中ではなく、むしろ選挙後の報道で真価を発揮していることが明らかになる。

選挙報道の特質 都知事選とコソボ紛争、ミッチー騒動に関する テレビ報道の比較

都知事戦に限らず、一般に選挙戦は投票日に向けてすべてのスケジュールが組み、その過程よりも結果が重視されるので、投票結果が出てからの数日に報道が集中するのは、ある意味で当然とも言えよう。そうした選挙報道の特質を明らかにするために、ここで他の出来事に関する報道パターンを取り上げて比較してみることにしよう。事件や事故に関する報道は、通常、1日ないし数日のうちに終了してしまうことが多い。しかし、3月25日からの20日間には、偶然にも、それ以降も長く継続して報道されるようになった2つの出来事が含まれていた。ひとつは、ユーゴスラビア共和国のコソボ自治州紛争であり(以下、コソボ紛争と表記)、日本時間の3月25日の早朝に北大西洋条約機構(NATO)がユーゴに対する攻撃を開始、その後も空爆が続き、この期間にはロシアの調停、難民流出、米軍捕虜の処遇などをめぐる報道が相次いで行われている。もうひとつは、阪神タイガース野村監督の沙知代夫人(サッチー)と剣劇女優の浅香光代(ミッチー)の大喧嘩である(以下、サッチー騒動と表記)。これは3月31日に浅香が、かつて舞台で共演した野村の不行跡を告発する会見を開いたことに端を発し、その後はメディア側が煽り立てる形で多くの芸能人を巻き込んで野村を非難(あるいは擁護)する騒ぎとなり、ついには1998年の参院選に出馬した際の学歴詐称で浅香が野村を告訴するという事態にまでエスカレートしていきのだが、この時期は、その前哨戦にあっている。これら2つの出来事のうち、前者は世界中のメディアが注目するような大ニュース、典型的なハードニュースであるのに対して、後者はソフトニュース、あるいはニュースとは言えないような騒動であるが、サッチー、ミッチーのキャラクターの面白さもあって視聴者の関心を集め、ワイドショーのみならず、スポーツ紙や週刊誌の格好の素材となっていたのである。

それでは都知事選関連の特別番組を除外して、レギュラー番組の中での選挙報道の推移をコソボ紛争、サッチー騒動に関する報道パターンと比べてみることにしよう。通常の情報・報道番組の中でそれぞれの出来事を扱った放送時間の総量を3月25日からの20日間にわたって整理した結果を図3、その日のすべての情報・報道番組の中でそれぞれの出来事を取り上げた番組の割合をカバー率として計算した結果を図4に示す。なお、ここでの分析対象となる番組数は、週日は28、土曜は19、日曜は18となっているが、時々放送中止で番組数が減ることもあった。また、民放の場合は、早朝の情報番組（以下、モーニングショーと表記）と午前、午後のワイドショーを一括して情報番組としているが、その数は報道番組の数とほぼ等しくなっている。NHKの場合は、民放のような

図3 レギュラー番組での都知事選，コソボ紛争，サッチー騒動の報道量の継時的変化

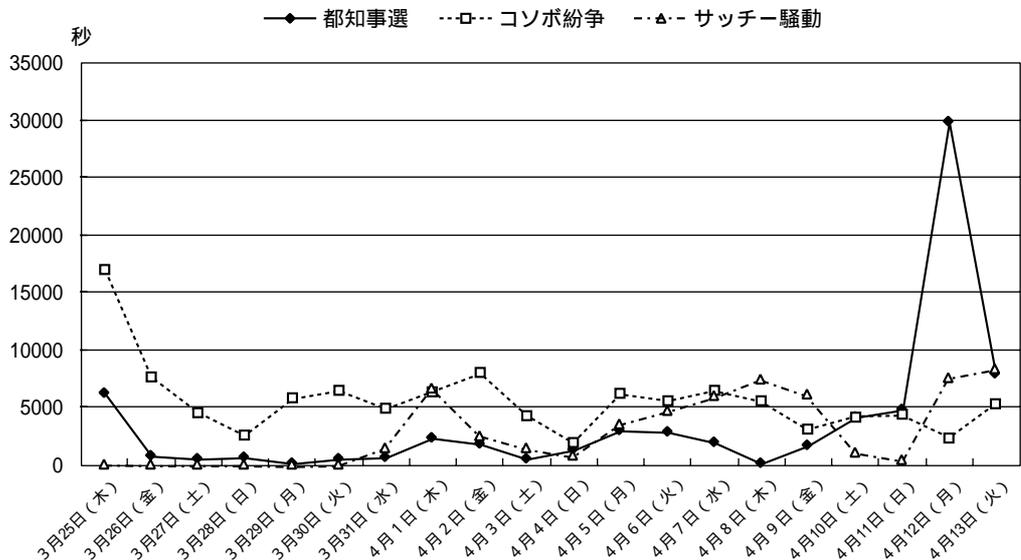
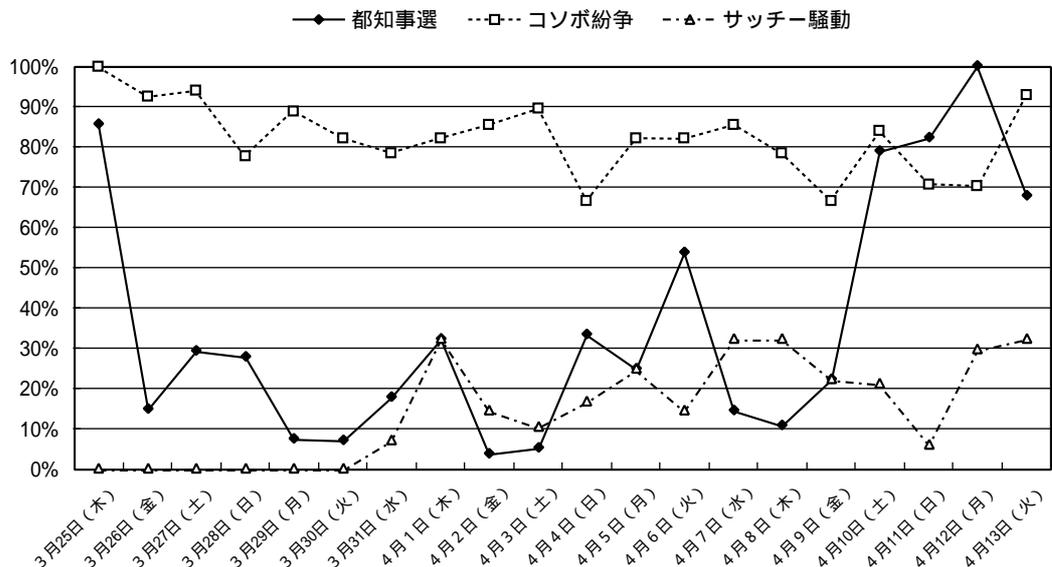


図4 レギュラー番組での都知事選，コソボ紛争，サッチー騒動のカバー率



情報番組は存在しておらず、従って、ここでの情報番組は民放に限定されている。

最初にそれぞれの出来事に関する20日間の報道量を調べてみると、コソボ紛争が最も大きくて31時間21分6秒、次いで都知事選は20時間1分2秒、ミッチー騒動は15時間59分22秒という数値が得られる。特別番組を除いてレギュラー番組の中での都知事選関連の報道量の継時的変化を示した図3の結果をみると、投票日（4月11日）の夜の開票速報の部分が削られて、投票翌日（12日）の報道量が突出した形になっており、この日だけで20日間の報道量の4割以上を占めていることがわかる。それに比してコソボ紛争に関する報道量は、NATO軍が空爆に踏み切った3月25日に最大値を記録しているが、その後もコンスタントに各番組で取り上げられており、特定の日に報道が集中するような傾向を示していない。都知事選の投票前日（10日）までは、常に戦争報道が選挙報道を量的に上回っており、投票日以降の2日間に限って、その関係が逆転する結果となっているのである。一方、ミッチー騒動は、3月31日の会見を契機に始まっており、従って4月に入ってから報道が本格化しているわけだが、NHKや民放ニュース番組ではこの騒動を全く取り上げていないにもかかわらず、いくつかのワイドショーで時間をかけて連日のように放送しているために、その報道量はかなり大きなものになっている。そうしたワイドショーは、土日には少ないために、週末になると報道量が落ち込むパターンが現われているが、4月8日、9日そして12日、13日では、その報道量はコソボ紛争の報道量を上回っているのである。

次に各事項のカバー率を整理した図4をみると、これら3種類の出来事に関する報道パターンの違いがさらに明確になる。前にも述べた通り、都知事選に関する情報を半数以上の番組でカバーしたのは、告示のあった3月25日、青島都知事が鳩山支援を表明した4月6日、そして投票が近づいた10日以降の4日間、併せて6日にすぎない。このうち投票翌日（12日）は、カバー率が100%に達しており、石原新都知事の誕生については、報道番組のみならず、モーニングショーやワイドショーでも押しなべて話題としている様子が示されている。しかし選挙戦の初日と最後の部分以外の中間の時期に関しては、実際には選挙運動が盛んに展開されているにもかかわらず、その話題を取り上げる番組は少なく、特に3月29日、30日、4月2日、3日の4日間はカバー率が1割を切り、選挙戦がほとんど無視された格好になっている。

このように都知事選に関するテレビ報道は、その時期によって顕著な量的変動を示しているのに対して、コソボ紛争に関する情報は、はるかに安定した形で供給されており、一番少ない時でも、その話題を7割近くの番組で取り上げていることが明らかにされている。コソボ紛争のカバー率が100%に達したのは、やはりNATO軍がユーゴ空爆を開始した3月25日の1日だけである。しかし、身近な日本での選挙報道とは異なり、外国での戦争報道は、それについて時間をかけて詳しく解説するようなことは少ないとしても、日々の展開、新たな動きを広い範囲の番組で万遍なく取り上げる傾向が強い。つまり今回の選挙期間においては、選挙よりも戦争に関する話題の方が、いわゆる情報番組にも、広く入り込んでいる様子が示されているわけである。

一方、ミッチー騒動は、それが勃発して以来、いくつかの情報番組で連日のように取り上げられ、スタジオでの話の種とされているが、しかしNHKや民放の報道番組では全く無視されているので、対象番組全体の中でのカバー率は、せいぜい3割程度にしか達していない。しかしながら一部の番組では、最もホットな話題として扱われているので、都知事選報道のような極端な浮き沈みを示すことなく、カバー率について言えば、低水準で安定した形になっている。ただ、この時期のサッチー、ミッチーの争いには、特に目新しい展開があったわけではなく、むしろ視聴率を上げるために放送局側が美輪明宏、

渡辺絵美，神田うの，デヴィ夫人らを巻き込んで，無理に騒ぎを大きくしているような印象を受ける。

情報番組で扱われるニュース

情報番組といっても民放各局が早朝に放送しているモーニングショーと午前，午後の時間帯に設定しているワイドショーでは，それぞれがターゲットとする視聴者層が異なっており，従って内容の構成の仕方も様相を大きく異にしている。会社や学校に出かける前の忙しい時間帯に放送されるモーニングショーの場合には，スポーツや芸能関係の話題を含めて前日のニュースを手短に次々と紹介する形式をとることが多く，1つの番組の中で同じニュースが何度も繰り返し放送されている。また，その日の朝刊各紙の記事を紹介するコーナーが例外なく設けられており，特に「やじうまワイド(ANB)」は，その日に発売の週刊誌を含めて他のメディアの情報を伝えることで番組自体が構成されているのである。もちろん各局の報道部門からのニュースが放送されることもあるのだが，モーニングショーのニュースの大半は，スポーツ紙と一般紙の情報に依拠していることになる。一方，比較的時間の余裕のある主婦層を対象として，それよりも遅い時間帯に設置されたと思われるワイドショーの場合は，番組による違いはあるとしても，モーニングショーのような多項目主義ではなく，むしろいくつかの事件や芸能界の話題を取り上げて，スタジオでのゲストを交えたトークを中心に据えて，時間をかけて放送することが多い。ワイドショーの中には，新聞や週刊誌の情報を紹介するコーナーが含まれていることもあるが⁽¹³⁾，その割合は相対的に小さくなっている。

それでは都知事選，コソボ紛争，サッチー騒動の3種類を素材として，民放の番組ジャンルによる報道傾向の違いを調べてみることにしよう。まず3月25日からの20日間で，それぞれの事項を各番組は何回取り上げ，その報道量は通算で何秒になるか，というデータを一覧表の形で整理した結果を表3に示す。なお，この表では，それぞれの番組名の後に民放番組のジャンルを表示しており，ここでは報道番組(N)と情報番組を区別するだけでなく，後者をモーニングショー(M)とワイドショー(W)に分けているが，週末の番組には，そのどちらとも区別しにくいものが多いため，それを別のカテゴリー(S)に一括している。そして，これに基づいて民放番組のジャンル別に，20日間の各事項の報道量の合計を求めた結果が図5，該当する番組のうち何番組で各事項を取り上げたかという形でカバー率を計算した結果が図6にそれぞれ示されている。

まず図5をみると，「ニュース番組におけるコソボ紛争」と「ワイドショーにおけるサッチー騒動」の報道量が飛び抜けて大きくなっていることが目につく。この両者を比べると，20日間の放送時間枠の総量はニュース番組201時間7分，ワイドショー174時間20分とワイドショーの方が少ないにもかかわらず，後者が前者をわずかに上回ることが示されているのである。前述したようにサッチー騒動はNHKや民放のニュース番組では全く無視されており，もっぱらワイドショーで集中的に取り上げられているわけだが，その日の出来事や背景を伝えることが重視される一般のニュース項目の扱いとは異なり，そこでのサッチー騒動の扱いは，事実関係を伝えることよりも，それに基づくスタジオでのトークの部分の比重が大きく，そのために放送時間が必然的に長くなっているわけである。サッチー騒動については，モーニングショーや週末番組でも取り上げているが

脚注

たとえば「ルックルックこんにちは(NTV)」では「話題最前線 奥さん新聞でーす!!」，「ビッグ・トゥデイ(CX)」では「ニ

ュースのぞき見隊」，「ワイド!スクランブル(ANB)」では「夕刊キャッチアップ」といったコーナーが常設されている。

表3 レギュラー番組での都知事選、コソボ紛争、サッチー騒動の報道量

放送局	番組名	延べ放送回数	延べ放送時間(分)	都知事選関連		コソボ紛争		サッチー騒動	
				回数	報道量(秒)	回数	報道量(秒)	回数	報道量(秒)
NHK	NHKニュースおはよう日本	20	2910	11	11257	19	10992	0	0
	首都圏ネットワーク	14	840	9	3803	6	828	0	0
	NHKニュース7	20	934	8	1939	19	5236	0	0
	NHKニュース9	14	420	2	493	14	4095	0	0
	ニュース11	14	490	2	518	13	3471	0	0
	週刊こどもニュース	1	30	1	41	1	63	0	0
	NHK週刊ニュース	2	90	1	560	2	247	0	0
	特報首都圏99	2	60	0	0	0	0	0	0
NTV	ズームイン!!朝!(M)	14	1260	5	1303	14	3768	0	0
	ルックルックこんにちは(W)	14	1610	3	1751	12	1447	8	7413
	ザ・ワイド(W)	14	1610	2	4803	12	2131	9	11717
	NNNニュースプラス1(N)	20	1410	8	2449	19	4501	0	0
	NNNきょうの出来事(N)	20	521	6	1923	20	4148	0	0
	ズームイン!!サタデー!(S)	3	363	1	22	3	1121	1	106
	ウェークアップ!(S)	3	270	2	1240	3	963	0	0
	THEサンデー+30(S)	3	345	1	29	3	532	2	570
TBS	おはようクジラ(M)	2	300	2	417	2	2226	0	0
	エクスプレス(M)	10	1440	2	481	10	1929	6	577
	JNNニュース1130(N)	14	420	6	839	14	3430	0	0
	ジャスト(W)	14	1610	3	482	2	114	6	2103
	ニュースの森(N)	20	1090	10	2311	20	3666	0	0
	筑紫哲也NEWS23(N)	14	811	6	2873	13	2880	0	0
	ブロードキャスター(S)	2	168	1	199	2	1664	1	60
	スポーツ&ニュース(S)	6	145	2	456	3	193	0	0
	サンデーモーニング(S)	3	312	3	820	2	821	0	0
報道特集(S)	3	162	1	40	1	548	0	0	
CX	めざましテレビ(M)	14	1750	7	2962	14	5600	5	848
	ナイスデイ(W)	5	450	0	0	3	251	1	670
	とくダネ!(W)	9	1035	3	3812	3	353	5	3096
	FNNスピーク(N)	17	480	3	547	17	4818	0	0
	ビッグトゥデイ(W)	4	440	1	165	2	214	1	700
	2時のホント(W)	9	765	2	589	3	356	8	10836
	スーパーニュース(N)	20	1800	7	3176	20	4260	0	0
	ニュースJAPAN(N)	19	1055	5	1973	19	4547	0	0
	土曜一番!花やしき(S)	3	465	1	5	3	808	2	568
	花やしき(S)	3	270	0	0	2	1392	2	1377
	報道2001(S)	3	255	0	0	1	2579	0	0
スーパーナイト(S)	2	99	0	0	0	0	1	574	
ANB	やじうまワイド(M)	17	2210	9	3032	17	6785	7	1543
	スーパーモーニング(W)	14	1610	2	1983	1	130	8	12048
	ワイド!スクランブル(W)	14	1330	4	1501	14	2635	5	1826
	スーパーJチャンネル(N)	20	1825	12	2632	20	6265	0	0
	ニュースステーション(N)	14	1100	5	2461	14	7127	0	0
	ザ・スクープ(S)	3	210	1	954	2	134	0	0
	サンデープロジェクト(S)	3	315	2	1023	0	0	0	0
	サンデージャングル(S)	3	165	1	1269	2	223	1	51
TX	ニュースワイド夕方いちばん(N)	20	935	7	2640	17	2526	0	0
	ワールドビジネスサテライト(N)	14	630	3	289	8	796	0	0
合計		496	38815	173	72062	411	112813	79	56683

* 民放番組名の後のNは報道番組, Mはモーニングショー, Wはワイドショー, Sは週末番組を表わす。

図5 民放番組のジャンルによる各事項の報道量の違い

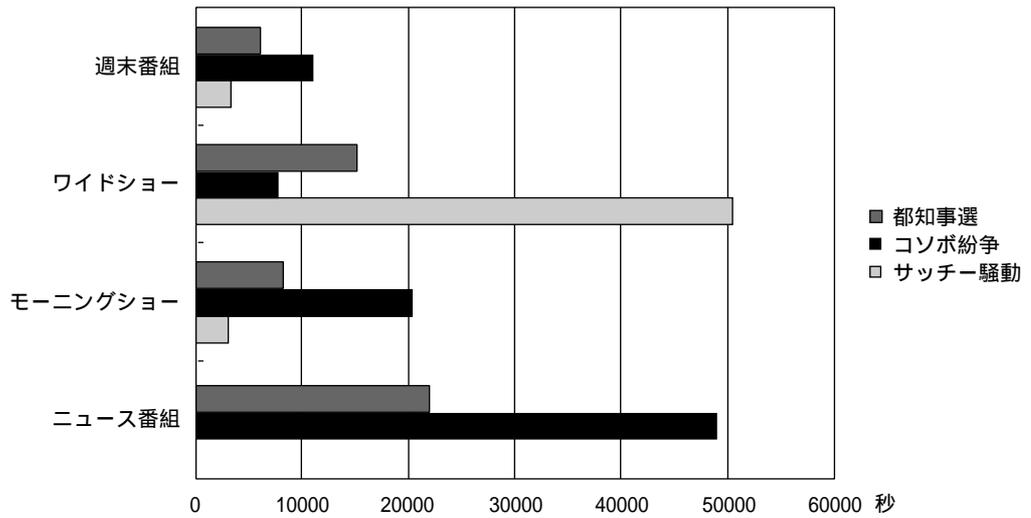


図6 民放番組のジャンルによる各事項のカバー率の違い

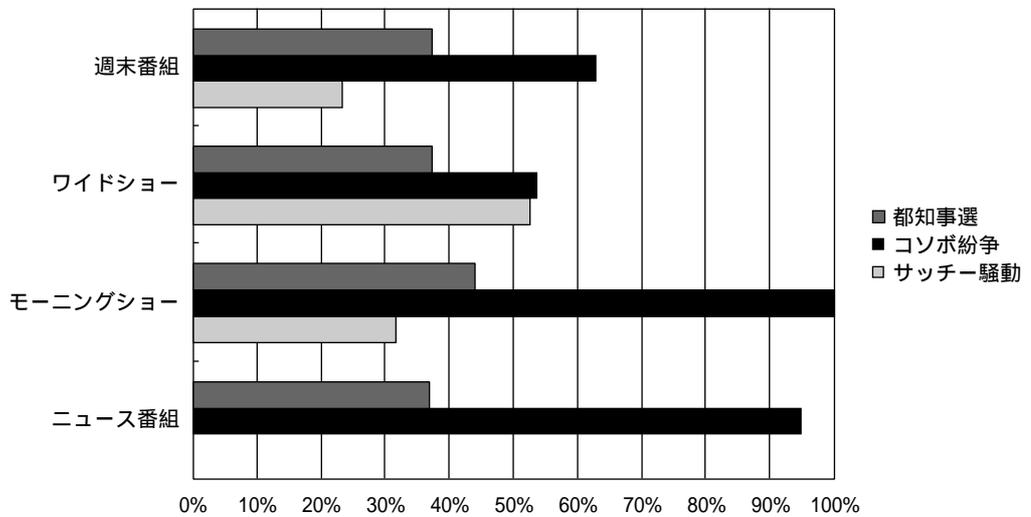


Figure & Table

(図6参照), その多くはスポーツ紙の記事に基づいて手短かに論評する形をとっており, カバー率はともかく, そこでの報道量はかなり小さなものになっている。一方, コソボ紛争に関しては, ニュース番組での報道量が最大になっているわけだが, しかしカバー率をみるとモーニングショーの方がニュース番組よりも高い割合でコソボ紛争に関する話題を取り上げていることがわかる。モーニングショーの場合には, さまざまな種類のニュースを網羅的に取り上げようとする傾向が多く, 従って各事項の報道量は少なくとも, 全体にカバー率は高くなる傾向を示しているのである。

そして最後に都知事選関連報道に注目すると, そのカバー率は, いずれのジャンルの番組についても, コソボ紛争のカバー率を大きく下回っていることが確かめられる。都知事選のカバー率は, 多項目主義のモーニングショーで最も高くなっているが, それでも44%と5割を下回っている。それに対してコソボ紛争のカバー率は, モーニングショーでは100%, ニュース番組では95%, それが最も低いワイドショーでも54%と5割を上

回ることが示されているのである。放送時間量をみても、ニュース番組とモーニングショーに関しては、カバー率と同様の傾向が認められるが、しかしワイドショーに関しては、逆にコソボ紛争よりも都知事選にかける時間が多くなる様子が現われている。ただワイドショーにおける都知事選関連報道は、ニュース番組やモーニングショーとは内容の趣きを全く異にしていることに注意する必要がある。ワイドショーの場合には、20日間にわたる都知事選関連の報道量の実に96%が選挙後の2日間、すなわち4月12日と13日に集中しており、そこでは選挙報道というよりも、むしろ選挙期間中の制約から解放されて、当選した石原や落選した候補者のプライベートな部分を含めて、人間的興味に訴えるようなストーリーが主流を占めているのである。

考 察

選挙報道に関する日本での実証的研究は、投票行動への影響、あるいは議題設定機能など何らかの効果の検出を主眼とするものが多く（池田，1997；東京大学新聞研究所，1988；堀江・梅村，1986など）、報道内容の分析自体を目的とするものは少ない⁽¹⁴⁾。一方、アメリカでは4年ごとの大統領選挙のたびにかなり広範なメディア報道の内容分析が行われている⁽¹⁵⁾。そうした研究の多くは、何らかのバイアスの例証を主眼としており、具体的には各党や候補者についての報道量と肯定的・否定的といった評価次元における公平性が主要な争点となっている。たとえばジャーナリストにはリベラル派が多いので「保守的な立場や共和党の候補者よりも革新的な立場や民主党の候補者の方が好意的に扱われる（liberal news bias）」あるいは「現職大統領は在任中の業績を批判されやすいので、挑戦者よりも厳しい扱いを受ける（the anti-incumbent bias）」といった仮説が提唱されているが、しかしそれらの研究結果は、必ずしも一貫した傾向を示していない（Efron, 1971; Garber, 1997; Hoffstetter, 1972; Lowry & Shidler, 1998など）。

そうした研究の対象となるメディアとしては、近年、新聞よりもテレビを重視する傾向が強まっているが、それらのメディア間の違いに焦点を当てた研究もいくつか行われている。たとえば1972年の大統領選挙における新聞とテレビの報道内容を比較したMeadow（1973）は、両者の違いよりも類似性を強調する結果を報告しており、それにニュース雑誌を加えたEvarts & Stempel（1974）は、雑誌は共和党、新聞とテレビは民主党に好意的な論調がみられるとしても、全体としてみればメディア・バイアスは少ない、という結論を下している。また1988年の民主党の予備選を素材として新聞とテレビの報道を比較したJohnson（1993）は、各候補の報道量についての新聞とテレビの差は小さいが、テレビのネットワークニュースは、事実の伝達よりも分析を重視するので、新聞よりも批判的な内容が多い、という結果を報告している⁽¹⁶⁾。

さらにアメリカの大統領選報道に関しては、選挙戦（horse-race）に報道が集中して、そこでの争点となる政策（policy issue）についての報道が充分になされていない、という批判も見受けられる（Buchanan, 1991; Domke et al., 1997; Patterson, 1980など）。それは新聞、テレビに共通に指摘される傾向であるが、1968年から1988年までの大統領選の

脚 注

1971年の都知事選に関しては柳井（1972）、1975年の都知事選に関しては武市ほか（1976）が新聞報道の内容分析を行っている。またテレビにおける選挙報道に関しては、第40回及び第41回総選挙の報道内容を比較した河野（1998）を参照されたい。日米の選挙報道、メディア・キャンペーンの違いについてはAkuto（1996）を参照されたい。

また、この研究では、ハート、デュカキス、サイモンの3候補のうち、新聞に比べてテレビの方が、起伏に富む選挙戦を展開したハートを多く取り上げ、地味なデュカキスやサイモンについての報道量が相対的に少なくなっていることを同時に明らかにしている。

テレビ報道の継時的分析を行ったHallin (1992) は、この間に政策問題を選挙戦の視点から報道する傾向が強まってきたことを指摘すると同時に、テレビでは候補者の人格に焦点を合わせることが多くなっているという仮説に関して、それを否定する結果を報告している。つまり候補者の個人的資質についての報道は、選挙戦や政策問題に関する報道よりも少なく、そこには時代による変化の形跡は認められないということである。

ところで東京都知事選を素材とした本研究では、テレビと新聞の報道量の分析が中心となっており、報道内容に関する質的分析は、まだ記述的水準にとどまっている。また、通常は民主、共和両党の候補者同士の一騎打ちの形をとるアメリカの大統領選と無所属の有力候補が乱立した今回の都知事選とでは、選挙の過程自体が大きく様相を異にしており、それに関する報道傾向を直接に比較するのは難しい。それでは、そうした限界を考慮しつつ、上記の選挙報道の争点に関する本研究の意味合いについて、最後に考察してみることにしよう。

まず公平性について言えば、今回の選挙戦に関する各メディアの報道は、その点への配慮を十分に示していたように思われる。NHKの経歴・政見放送といった公式的行事を別にすると、いわゆる泡沫候補を含めて候補者全員を同等に扱うのは非現実的であり、テレビや新聞の報道が少数の有力候補に焦点を合わせるの、仕方のないことであろう。ただ主要候補を6名とするか、ドクター・中松を含めて7名とするかに関しては、放送局や新聞社によって対応が異なっていたが、それらの候補の扱いはいずれもきわめて慎重で、たとえばテレビニュースで選挙演説の様子を映し出す際には、有力候補全員を取り上げて時間配分を均等にするだけでなく、その順番も一定にする、といった配慮が示されていた。今回は、報道の論調が肯定的か否定的かといった評価次元での分析を行ってはいないが、選挙期間中の報道の多くは事実の伝達に徹しており、あまり評価を含まないニュートラルな内容が大多数を占めているように思われる。

ただテレビと新聞を比較すると、両者の類似性を強調することが多いアメリカでの研究結果とは異なり、その報道傾向には明確な違いが示されている。新聞各紙は、各党の候補者選びが本格化した2月の段階から都知事選に関する連載をいくつか開始しており、選挙後もそれを継続しているのに対して、テレビの選挙報道は、特定の日に集中する傾向が強く、何かの争点や問題などを継続して伝えようとする姿勢を著しく欠いている。またテレビに関しては、選挙報道に関するNHKと民放の立場の違いが明確になり、両者の役割が分化する傾向が示されている。すなわち告示前は民放を舞台に立候補予定者によるテレビ討論が盛んに行われていたが、それは告示日を境に一斉に姿を消し、正式の選挙期間に入ってから経歴・政見放送をはじめとしてNHKの方が各候補の政策を伝えるうえで主導的な役割を担うようになっていたのである。民放の場合には、公平性への配慮を意識しすぎて腰が引けたのか、選挙期間中の報道は質量ともに抑制されてバラエティに乏しく、候補者に関する情報を積極的に視聴者に伝えようとする努力をみせず、一貫して消極的な態度に終始している。選挙報道が投票日前後に集中するのは当然だとしても、そうした傾向は新聞よりもテレビ、テレビの中では民放に関してより顕著に現われている。換言すれば、この結果は、民放テレビの場合には、投票日前後以外の時期における選挙報道がいかに貧弱であったかを反映していることになる。

そして報道内容に関して言えば、選挙期間中のテレビ報道は、もっぱら選挙戦の動きを報じることに終始して、新聞各紙のように主要候補の政策などを継続的に伝える努力をほとんど示していない。ただし選挙期間に入る前には、テレビ討論を通じて立候補予定者の政策や人柄を伝えるうえで民放は大きな役割を果たしているし、また選挙終了後

は、当選した石原や落選した候補の何人かに焦点を合わせ、その家族やプライベートな情報を含めて多様な情報を提供しているのである。民放の場合には、報道番組だけでなく、モーニングショーやワイドショーなどの情報番組でも都知事選関連の話題を取り上げているが、それらの情報番組は、むしろ選挙後に真価を発揮して、選挙期間中は取り上げられることのなかった候補者に関する情報を人間的興味に訴えるストーリーに仕立て上げて伝えているわけである。それは選挙報道に限られるわけではないが、今回の都知事選報道の分析を通じて、新聞とテレビ、テレビに関してはNHKと民放、また民放の中では報道番組と情報番組、さらに情報番組の中ではモーニングショーとワイドショーという具合に、それぞれの役割が分化している様子が具体的に示されたことになる。

引用文献

- Akuto, H. (1996) Media in electoral campaigning in Japan and the United States. In S. Pharr & E.S. Krauss (Eds.), *Media and politics in Japan*. Honolulu: University of Hawaii Press, pp. 313-337.
- Buchanan, B. (1991) *Electing a president: The Markle commission report on campaign '88*. Austin: University of Texas.
- Domke, D., Fan, D.P., Fibison, M., Shah, D.V., Smith, S.S., & Watts, M.D. (1997) News media, candidates and issues, and public opinion in the 1996 presidential campaign. *Journalism and Mass Communication Quarterly*, 74, 718-737.
- Efron, E. (1971) *The news twist*. Los Angeles: Nash Publishing.
- Evarts, D., & Stempel, G. H. (1974) Coverage of the 1972 campaign by TV, news magazines and major newspapers. *Journalism Quarterly*, 51, 645-648.
- Graber, D.A. (1997) *Mass media and American politics*. Washington, DC: CQ Press.
- 萩原滋・斉藤慎一・川端美樹・横山滋・李光鎬・福田充 (1999) 変容するメディアとニュース報道～テレビニュースの娯楽化傾向の検証～ *メディア・コミュニケーション*, 49, 1-31.
- Hallin, D.C. (1992) Sound bite news: Television coverage of elections, 1968-1988. *Journal of Communication*, 42, 5-24.
- Hoffstetter, C.R. (1976) *Bias in the news: Network television news coverage of the 1972 election campaign*. Columbus: Ohio State University Press.
- 堀江湛・梅村光弘編 (1986) 投票行動と政治意識 慶應通信
- 池田謙一 (1997) 転変する政治のリアリティ～投票行動の認知社会心理学 木鐸社
- Johnson, T.J. (1993) The seven dwarfs and other tales: How the networks and select newspapers covered the 1988 democratic primaries. *Journalism Quarterly*, 70, 311-320.
- 河野武司 (1998) 第40回及び第41回総選挙に関するテレビ報道の比較内容分析 *選挙研究*, 13, 78-88.
- Lowry, D.T., & Shidler, J.A. (1998) The sound bites, the biters, and the bitten: A two-campaign test of the anti-incumbent bias hypothesis in network TV news. *Journalism and Mass Communication Quarterly*, 75, 719-729.
- Meadow, R.G. (1973) Cross-media comparison of coverage of the 1972 presidential campaign., *Journalism Quarterly*, 50, 482-488.
- Patterson, T.E. (1980) *The mass media election*. New York: Praeger.
- 武市英雄・松木修二郎・山田実・山中正剛 (1976) 東京都知事選挙 (1975年) をめぐる新聞紙面の分析～朝日・毎日・読売・サンケイの4紙を中心にして～ *新聞学評論*, 25, 48-67.
- 東京大学新聞研究所編 (1988) 選挙報道と投票行動 東京大学出版会
- 柳井道夫 (1972) 東京都知事選挙におけるマス・メディアの対応～「みのべ」「はたの」の支持率に関する新聞報道を中心として～ *新聞学評論*, 21, 36-54.

- (萩原 滋 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授)
(福田 充 常磐大学人間科学部専任講師)
(横山 滋 NHK放送文化研究所主任研究員)
(李 光鎬 東京工科大学メディア学部助教授)
(川端美樹 福島女子短期大学助教授)
(斉藤慎一 東京女子大学現代文化学部助教授)